

碁

季は	地は	ツレ	シテ	ワキ	前
夏	京都	軒端荻	空蟬	前に同じ	東国の僧 里女

次第

「雲井の都はるぐと。く。鄙の長路を急がん。

ワキ詞

「是は東国がたより出でたる僧にて候。我未だ都を見ず候ふ程に。此度思ひ立ち都に上り候。

道行

「東路の。道の奥なる国出でゝ。く。影もうらゝに出づる日の。雲井は行方はるぐの。海山過ぎて近江路や。関の名なりし白川や。都に早く着きにけり。く。

詞

「是は早都に着きて候。こゝをば三条京極中河の旧

跡とやらん申し候。ふる事の思ひ出でられて候。

親にて候ふ者常は源氏物語を口ずさみ候ひし。亡

父の情も今更に。物あはれなる折からかな。空蟬の身をかへてげる木のもとに。猶人がらのなつかしきかな。かやうに詠ぜしも此所にての事なるべし。あらあはれなる古跡やな。

シテ詞

「なふくお宿参らせ候はん。柴の庵のいぶせくとも。むかし忍ぶの乱れなれば。軒もふりたる局

の内。

弔ふ人もなき跡を。又おどろかす空蟬の。

言の葉草の庵のうちに。思ひ余れる心かな。

ワキ詞

「いや是はたゞ何となく。源氏物語を口ずさみ候ふ
処に。かやうに問はせ給ふ御身はさて。いかなる
人にてましますぞ。

シテ
「いや何となくとはの給へども。こゝは処もふりに
し跡の。其中河のやどりなれば。我も昔のあとな
つかしく。思へば慕ひ出でたるなり。

ワキ
「聞くにつけてもなまめきて。よしある人は黄昏に。

空目なりしは夕顔の。宿こそかはれ。

シテ

「へだてなき。

地
「えにしある。道は妹脊の中河の。逢瀬を知ればう
たかたの。あはれ其夜の方たがへ。今はいづくに
かはるらん。實にや尋ね行く。幻もがなつてにて
も。魂の有りかはなつかしや。く。

シテ詞

「いかに申すべき事の候。今宵は此宿に碁を打ちて。

旅の心を慰めまるらせ候ふべし。

ワキ詞

「実にく此所にて。空蟬の碁の勝負の有りし由聞
き及びし事なれども。今宵は誰とか打ち給ふべき。
シテ「あら何ともなや。さて其時の片つかたをば。誰と
か知しめされて候ふぞ。

ワキ「いで其あらそひは。軒端の荻とやらん。

シテ「さればこそ時しもあれ。折からなれや秋風の。ほ
に出ですぐる夕まぐれ。露も嵐も下にのみ。

地「忍べども。軒端の荻の穂に出でゝ。く。姿まみ
えん我もまた。今は何をかつゝむべき。その空蟬
の羽衣の。しほじみてさめぐと。泣くと思へば
失せにけり。く。(中入)

ワキ歌

「朽ち残る。木の下臥しに旅寝して。く。聞けば
声する空蟬の。跡とふ法の様々に。弔ふ縁は有難
や。く。

シテ、ツレ二人「ほのかなる軒端の荻の夕あらし。事とふ秋の夕べ

かな。

ツレ「消えにし露のかごとをば。何とか聞ける心ぞや。

ワキ「不思議やなきもなまめける女性二人。あらはれ給ふは如何なる人ぞ。

シテ詞
「うたてと忘れ給へるや。宿まるらせしゆふべの人
は。我こそゝれよ空蟬の。

ツレ「名残ほどなき軒端の荻の。ほのみし人はうらめし
や。

シテ
「よしや恨みも中河の。思ひぞ出づる月の夜に。碁
打ちて恨みを晴らすべし。

ツレ「げにく御僧の御前にて。懺悔の姿を。

シテ
「あらはさば。

地
「終にはあらじ生死の。海なれや数々の。浜の真砂
の石だて。あらそふも心つよからずや。女の碁の
勝負。うつゝなの風情や。

クリ地
「それ碁は定恵の二手を見せ。打つ音に阿吽のひゞ

きあり。されば目の前に。生死の命期をあらはしては。則ち涅槃のかたちを見す。

シテサシ
「石の白黒は夜昼の色。

地 「星目は九曜たり。目を三百六十目に割る事は。是れ一年の日の数なり。碁は敵手にあうて手だてを隠さず。わづかに両三目に。従来十九の道有り。ある時は四面をかこまれ一生をもとめ。ある時は敵を攻めいと攻められ。恋しき時はうば玉の。夜の衣をかへしても。寐ばまやすらん波枕。浮木の亀のおのづから。一目劫なりと。立てゞいかゞ有るべき。されば生死の。二つの河を渡りての。中に白道をあらはし。黒石はよしなや。今打つ五障三従の。女の身には遁れえぬ。業ふかき石だて。心していざや打たうよ。

ロンギ地
「源氏の巻や絵合の。勝負は知らねども。名を聞くも竹川の。ふし有る名を桐壺。

シテ 「筈木の巻の碁の勝負。打ちしめりたる雨の夜に。

手品をいざや定めん。

上地

「夕顔の宿に碁を打てば。たそかれ時もはや過ぎぬ。
そらめせし半蔀を。おろすや中手なるらん。

シテ 「絶ゆまじき。筋を尋ねし玉かづら。止長にいざや
掛けうよ。

地 「石は白。名は髭黒の大将の。

シテ 「真木柱名をぞ立つ。した煙胸くゆる。火取の灰を

打ちかけられ。ねたやな恋の二道。梅が枝紅梅巻々
の。匂ふもかをるも分きかぬる。身を宇治山の霜
雪の。茂木の下根春さむみ。萌え出で兼ぬる早蕨
の。手を見せぬことぞ悲しき。急いで碁を打たう
よ。春一手二手。見ていざや目算せむ。四手五手
六目ぶしとか。七うち八うち九うち。十市の里の
碁の勝負。砧によせて打たうよ。

シテ 「砧は千声万声碁は。

地 「百度千度万手。空蟬は負けたり。軒端の荻の秋来ぬと。かつ穂に出づる蘆分舟。押すこそ恨なりけれ。

シテ 「おさでは叶ふまじき此碁。乱れ心は悲しやな。かくて夜も更け人しづまれば。人影そひて灯の。

地 「光る君とて忍寐の。みなしかりける契りかな。

シテ 「恨めしと思ひて。

地 「世の聞えも空蟬の。もぬけとなりて這ひ出づれば。

衣は跡に身は木がくれてかたはらに泣くく。忍びねもよしなやな。せめて恨の中の衣を。抱き帰りて身に触るれば。今ぞ思ひの小夜衣。そのうつり香もなつかしく。何なかくの思ひ出は。

地 「空蟬の。

シテ 「うつせみの。羽にこそかはれ軒端の荻。

地 「露のかごとは。

シテ 「恨めしや。たゞく恋し悲しと。見し事も。夢の

浮橋とだえして。現に返す薄衣。身を空蟬も軒端の荻も。かれぐに成り行く。跡こそあはれなりけれ。

底本：国立国会図書館デジタルコレクション『謡曲評釈 第六輯』大和田建樹著